ダブルスの王子様～ALL　JAPAN～

福士　ミッチェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルスの王子様～ＡＬＬ　ＪＡＰＡＮ～

【Ｎコード】

Ｎ５１６６Ｙ

【作者名】

福士　ミッチェル

【あらすじ】

白石蔵ノ介の従兄弟、白石北斗を視点に高校合宿で成長していくストーリーです。

プロローグ

俺の名前は白石　北斗
柿ノ木中学校の三年生でテニス部の副部長である。
俺たちの代ではかつて名門といわれ全国にも何度も出場している面影はなく
関東大会がせいぜいというくらいであった。

3年生としては最後の大会となった今夏の大会では地区予選ではベスト4まで勝ち進むも
準決勝では新興勢力不動峰にストレートで負け、俺の出番が回る前に終わってしまった。
しかも、部長である九鬼が相手の二年生に1セットもとれず負けるという惨敗であった。
これによって俺の3年間はあっけなく終わったかに見えたが・・・

本職である、ダブルスでは激戦区である関東を勝ち抜き、団体戦で一躍有名になった
強豪ペアが集るなか、俺の親友でもあり相棒である殿馬　幸喜と俺のペアは
クジ運に恵まれたのもあるが、順調に勝ち進みベスト4に進出した。

残念ながら、準決勝で青春学園を優勝へ導いたゴールデンペアと名高い菊丸、大石ペアには
タイブレークまでせるも負けてしまったが総合3位という成績で最後を締めくくり
なんとか名門柿ノ木の面目は、こういう形ながらも維持（？）できたのかもしれなかった。

その成績が、響いたのかもしれないが俺と殿馬はそろって高校日本代表候補のキャンプに参加する
中学生５０人に選出されたが、相方の幸喜は家庭の事情を理由に要請を断ってしまい・・・
俺一人で合宿に参加することになってしまった。

早速現地にいってみたらいったで初日から大慌てである。中学生の参加を快く思わない
高校生に罵られるわ、首脳陣から誘ってきやがったのに３００人は少々多いいからって
ボールをとれなかった者は速やかに帰れとか言われる事態に発展しなんと、そこで中学生達がボールをまとめてふんどってしまい、
大半の高校生がボールを取れない事態が起こり、怒った高校生がテニスで決着つけようぜといい始めて・・

いろんなコートから中学生と高校生がボールを打ち合う音が聞こえる。
そして、それを見る高校生の中学生に対する罵声もそこらかしこで聞こえてくる。
ここまでは、普通の出来事だったいや・・中学生を気に食わない高校生はたくさんおり
罵声をあびせたくなるのは当然である。

しかし、この状況下でありえない現象が起こっていた。
そうそれは、すべてのコートにおいて中学生が勝っているという出

来事だ。
しかも、中学生の一方的な展開で・・・
今もまた一人。二人と高校生が負けては嘆く声が聞こえているのも事実であった。
それと同時に中学生も一人、二人と高校生に指名されては試合をやらされている。
俺は幸いまだ指名をされておらず、ただ一人突っ立って試合を見ていた。
そんな時、高校生の大声が間近で聞こえてきた。
『おい、そこの白髪野郎！！俺と勝負せんかい！！！』
『お・・俺ですか！？』
いきなり、大声で指名され驚く白髪の少年・・・・
『はよ出てこんかい！！』
『はいはい・・わーとりますよ』
白髪の少年がシブシブラケットを手に取りコートに出た。
そのやり取りを見ていた俺はその少年がコートに出たときビックリした。
何故なら・・・白髪の少年とは俺の従兄弟であり四天宝寺中学テニス部部長
白石　蔵ノ介だったからである。
俺も小学生の頃までは、大阪に住んでいて従兄弟である蔵ノ介とはよくテニスを競い合った仲間である。

だが、あいつは天性の才能なのか・・俺よりもみるみる上達していき・・
しまいにはアイツには全然勝てなくなっていた。

中学生になる頃・・俺は親の都合で東京へと引越しやがてあまりあわなくなったが
この三年間・・・アイツは完璧を求めるテニススタイルを確立し試合になると私情を切り捨て
基本を忠実にもとめるがゆえのパーフェクトテニスで四天宝寺を今夏の大会でベスト４に導く
立役者になっておりその働き振りから通称『四天宝寺の聖書（バイブル）』なんて言われていると聞いた。

俺も、ダブルス全国３位とはなったもののやはり大会と花形といえば団体戦でありそっちにばかり注目されるがあまり・有名ではないのがげ　ん　じつであった。

四天宝寺の聖書

白髪の少年は、メンドくさそうな雰囲気を漂わせながらもセンターライン際についた。
その背中は・・2年半前のアイツとは違う・・成長した、いや四天宝寺の部長としての大きな背中だった。

そういや、アイツのテニスを生で見るのは俺が引越しをする前日・・・あの日以来だ。
あの日を境に俺たちは離れ離れになって、話すことも連絡をとりあうこともなくなっていた。

だけど、俺がテニスを始めたのもアイツがいたからだった。アイツがいなかったら今俺はこの場所にはたっていなかったであろう。

ともあれ、アイツのテニスを見るのは久しぶりで今俺の心の中はわくわくしている。
この二年半アイツは『パーフェクトテニス』とかいうテニススタイルを確立させて
四天宝寺の部長として全国ベスト4へ導く活躍をしたというのは月間プロテニスなどで聞いていた。
だけど、本物を見るのは今日が始めてである。

一体どんなテニスをするのか・・・俺は8番コートに釘つげになった。

「ハンデくれてやらぁ。お前からサーブしろ。」

「えっ、ホンマいいんですか？」

蔵ノ介は冷静な反応で言い返した。

「そうだ。感謝しろよな！」

そういうと高校生はテニスボール一個を蔵ノ介のほうへ渡した。

そのボールは蔵ノ介の前でワンバウンドするとそのまま吸い込まれるかのように蔵ノ介の手の中に納まった。

「んじゃ・・遠慮なく生かせてもらいますわ。」

いよいよ、試合が始まる。２年半たったアイツはどんなサーブを打つのか・・

相変わらず回りからは高校生からのヤジの応酬ばっかだが、今のアイツは全然気にしてないようだ。

蔵ノ介は勢いよくボールを上に投げ、そこから目一杯の力でボールを放った・・・

そのボールは対角線上にある相手のサービスラインへと突き刺さる。

「そんな、ちゃっちぃサーブじゃ通用しないぜ！！」

高校生はなんなくボールを逆サイドセンター際へ返す。

本来なら返すのも難しい球だが・・しかし蔵ノ介はすぐに華麗なステップで追いつくと更に角度をつけて返球すると同時に前へダッシュした。

「前へでようたって無駄だ！」

高校生はすかさず逆サイドを狙う・・・

だが、蔵ノ介にはもう打つコースが見えていたようだ。

ボールの軌道上へいち早くつくと、ボールの勢いを抑えたうまいローボレーで打ち返した。

勢いを失って蔵ノ介のラケットから放たれたボールは、ネットの白帯にかかった。

ポト・・

そのままバウンドせず高校生のコート上で転がり制止した。

「なっ・・・！？」

高校生は今の一瞬の出来事に唖然としている。

そんな高校生を尻目に蔵ノ介は余裕の表情であった。

そして・・決めセリフ・・

「んんーーーー絶頂（エクスタシー）。」

『まったく・・無駄のない。完璧なテニス。』

無意識のうちに俺はそんな言葉を言っていた。

コーナーギリギリを狙いそしてダッシュしてネットにつめることで相手を必然的に逆サイドへと打たせ

そのボールを技ありドロップショットでフィニッシュ・・・

これが・・・基本に忠実があるが故の・・『パーフェクトテニス』

なのか。
俺が予想していたものとは違う・・明らかに超中学生級テニススタイルだった・・・。
こんなに強く・・勝利に執着したのか・・・アイツは・・

その後といえば、高校生は蔵ノ介の変幻自在なテニスの前に手がでず一点もとれないまま
蔵ノ介のマッチポイントに・・

「右サイド、がらあきですわ！」
蔵ノ介はこれまら右コーナーギリギリにボールを運ぶ。
これには高校生も手が出なかった。

結局そのまま、蔵ノ介の圧勝で幕を閉じた。

『すごすぎる・・・』
これが、更に進化したアイツのテニスであった。
指摘する動きなど全くない・・ただ勝ちに行くアイツの完璧なテニスをまざまざと見せられた。
俺との差はさらに広がっていたような気さえした。

試合が終わった後、俺は話しかけようと思ったが彼の試合を四天宝寺の部員が見ていたらしく
呼ばれるがままアイツはいってしまった。

それと同時に・・
『もう、ボール取れなかったヤツは帰れや！！醜態さらすだけだ！！』
どこからともなく、現れたイカツイ高校生が現れボールを取れなかった高校生達を追っ払い始めた。

突然の試合中止に驚く中学生・・だがその中には
『なんや・・もっとやりたかったんに・・』
と愚痴をこぼす中学生さえもいた。

しかし、後からきた高校生達に言いくるめられ試合は中止になった。
中学生の完全勝利という形で・・・

俺はその後合宿所の施設を案内され初日を終えるハズだった。。

まさかの・・・

波乱の幕開けのとなった日本代表合宿初日・・・
今日一日だけで、いくつもの困難が立ちはだかったが、今俺達中学生は最後の施設内見学を終え
本館の集合場所に戻ってきたところだ。

『以上で施設内見学を終りにする。各自自分の寝室に行って荷物をまとめて一時間後に食堂に集合だ。
分かったな～』

『ハイ』
そういい終えると、中学生達は各自に割り当てられた寝室へと向かっていった。
俺も、配られたプリントに書いてあった自分の部屋へと足を進めた。

俺の部屋は３０２号室である。この施設の最上階ではあるが、３０２号室は割りと階段に近いため
移動はそんなに苦にはしないだろう・・なんてことを思いつつ階段を昇っていった。

この合宿の寝室は４人一部屋という割り当てだ。
プリントにはダレと一緒なのかは書いてなくただ自分の部屋だけ記載してあったので
自分自身誰と一緒なのか分からない・・。

っていってもこの合宿で喋ったことがあるのは蔵ノ介と後は試合の後ちょっと話した菊丸と大石である。
それ以外でも一緒になった人たちとは積極的に喋るようにしようと

思う。

やがて、3階へと辿り着き自分の部屋の前へと行き・・部屋の前へに掲げられている割り当て表を見た・・。

俺は誰と一緒なのかな～と最初は陽気な気分であったが割り当て表を見ると俺は一瞬で凍り付いてしまった。

だって・・そこには・・自分の部屋は予想もしなかったアノ選手達と一緒だったのである。

そこには・・こうあった。

302号室
白石・幸村
白石・不二

俺は一瞬目を疑った。なんどもなんどもこれは夢だと思った。

だけど、目の前に書かれている出来事は変らない！！

白石はともかく・・幸村に不二！？

二人とも今年の全国で活躍し名を馳せている神の子幸村と天才不二である。

そんな、二人と同部屋！？そして・・白石とも同じ・・・

なんちゅう神のイタズラなんであろう。

俺から見たら雲の上の人たちと一緒の部屋・・・

この事態だけは予想外であった・・・。

ともあれ、中の電気は点いていなく、他の3人もくる気配はないので
とりあえず部屋の中で荷物整理しながらまつことにした。

中に入ってみると右側、左側の両サイドに二段ベットがあり、奥に
は二台の机があり
その上に観葉植物がおいてあった。
施設内見学でもこれが最先端と思わせる設備に驚いたが、部屋もこ
れまた広く開放感があって凄かった。

少しばかり、部屋に見入ってしまっていたが、まだドアの向こう側
に荷物おいてあるのを思い出して
ドアに手をかけようとした。

その時・・・
向うからも中に入ろうとした人がいたらしく・
突然目の前に人がが現れた。

『うおおおおっ!?』
同時に二人叫んだ・・・。
相手は荷物を落とし後ろによろめいた。

酷く相手は驚いていたが、向うが先に自分の顔に気がついたらしく

『お・・お前は!?』

その男は2年半ぶりに聞いた声・・まさしくアイツであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5166y/

ダブルスの王子様～ALL　JAPAN～

2011年11月21日23時50分発行